沖縄の旅 2024

2024 年 4 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

春の沖縄に行ってきた。沖縄本島に始まり北大東島と南大東島そして与那国島という離島を巡って島の魅力を堪能してきた。最初は 2 人旅、途中から同行者が代わり 4 人旅になるという変則的な旅だが、それも含めて楽しい旅になった。

第一章　沖縄本島

■旅が始まる

那覇空港に降り立った私たち 2 人はレンタカー会社の送迎車に乗っている。

予約したレンタカー店は空港からかなり離れているおり送迎に時間がかかる。しかし離れているから安い。何しろ小型車を 2 日間借りて 5900 円と格安だ。この格安レンタカーを借りてくれたのがノブさんで、今回の旅の前半の相棒になる。私のサラリーマン時代の同僚で、昔から離島などの辺ぴな場所に一緒に行く、いわば“秘島ハンター”だ。

私は沖縄本島には過去何回か訪れているが、最北端の辺戸（へど）岬には行っていない。那覇から最北端までは約 120km、高速道路を使えば 2 時間もすれば着く。

途中、高速道路のサービスエリアで沖縄名物「ソーキそば」を食す。ソーキとは豚の骨付きあばら肉のことで、つまりスペアリブだ。スペアリブが乗っていればソーキそばになる。肉は柔らかく、出し汁もいい味で、沖縄にやってきた実感が湧いてくる。

ちなみに骨付き肉ではなく普通の三枚肉、つまり豚のバラ肉ならば「沖縄そば」になる。どちらも“そば”とは言っているが、蕎麦粉は使っておらず、小麦粉を使っているので分類上は中華麺、つまりラーメンになる。

【ソーキそば】

■辺戸岬

最北端の「辺戸岬」にやって来る。石灰岩の白い岩が足元にゴツゴツあって、岬の先端は独特の節理が入った岩肌が切り立つ断崖になっている。

先端に立つと、何とも言えない迫力を感じる。3 方を海に囲まれており、左が東シナ海、右が太平洋、正面には鹿児島県の与論島が見えるはずだが、残念ながら本日は曇天なのでそれは叶わない。

観光客はあまりいない。それでも何組かの観光客が訪れており、日本人よりも欧米人の方が多い。やはり沖縄本島に米軍の基地が多くある影響かもしれない。

断崖と石灰岩、外国人観光客という全く予想していない情景に、私たちは感激している。

【沖縄本島最北端の「辺戸岬」】

私の持論「期待と落胆、偶然と感動」は、期待して行くと落胆することが多いが、あまり期待せずに行って、偶然出会う感動は何倍にも増幅されるというもので、この岬は期待していなかったというと少し言い過ぎだが、明らかに予想を上回っている。

■同窓会

しばらく感動に酔いしれて那覇に戻る。夕方から那覇の沖縄料理店で、8 年前に行った地球一周の船旅の同窓会が開かれる。私の今回の旅の目的の一つはこの同窓会に参加することなので、本日は那覇に宿をとってある。

ノブさんはその船には乗っていなかったので同窓会に参加せずに、1 人で美味しいステーキを食べてくると意気込んで別れる。秘島ハンターはステーキハンターになっている。

同窓会は船を降りてから何回か開かれているが、参加人数は今回が一番少ない。それでも遥か沖縄におよそ 40 人も集うのは、あの船旅が参加者たちに強烈な影響を与えたのだろう。

オリオンビールと泡盛、沖縄料理、最後は歌と踊りの沖縄スタイルで同窓会を締めくくる。

二次会にも繰り出し、旅の話で盛り上がる。この人たちと話していると「旅の感動のために日常を生きている。むしろ旅に餓えている」と感じてしまう。

【同窓会の風景】

■最南端

昨夜の泡盛が効いたようで、朝起きると多少酒が残っている。それゆえノブさんに運転を任せる。彼は高級ステーキを堪能したから、気力も体力も充実している。

沖縄本島の最北端の次はやはり最南端だろうと、最南端の「荒崎」にやって来る。

単なる岩場の海岸で看板もなく、観光名所にもなっていない。最北端のような感動はないが、観光客がほとんど訪れた形跡がないからある種の優越感を満喫する。

荒崎に「ひめゆり学徒散花の跡」という小さな碑がある。知らなければ見過ごしてしまうような碑で、第二次世界大戦末期、13 名の女子学生がこの海岸で自決したと碑には書かれている。

私たちは碑の前でそっと手を合わせる。

【荒崎の「ひめゆり学徒散花の跡」の碑】

■沖縄と戦争

昨日の同窓会で沖縄在住の人が「是非ひめゆりの塔を訪れて欲しい」と言っていたのを思い出し、「ひめゆりの塔」を訪れ献花する。

戦争とは無残でむごいものだと分かっているが、先ほどの 13 人よりも多い 53 人が集団自決した現場を目の当たりにすると、言葉が出ない。私は過去に何回か訪れているが、今回一番感じるものがあるような気がする。それは私が年齢を重ねたからだろうか。

【ひめゆりの塔】

しかしこの惨劇があった沖縄に、かつて敵国だったアメリカの軍隊（米軍）が駐留している。

それを見るべく宜野湾市の「嘉数高台公園」を訪れる。高台にある公園からは「普天間基地」を見ることができる。基地の周りは人口密集地でたくさんの住宅がある。

基地には米軍の「オスプレイ」が 10 機以上整列して置かれている。

若くして自決した女子学生たちの碑に手を合わせた後、この機体を見て私は少し困惑している。そんなオスプレイに向かって「戦争には行くなよ、災害救助や緊急搬送にこそお前たちの力は発揮すべきだ」と声を掛けた。

【嘉数高台公園から見た普天間基地】

■首里城

「首里城」を訪れる。琉球王国のグスク（城）で、第二次世界大戦末期の沖縄戦で破壊され 1992 年に再建された。しかし 2019 年の火災で焼失し、現在は再建工事をしている。

莫大な工事費用の一部に充当する目的で、再建工事現場を有料公開している。体育館のような建物が 2 棟あり、1 棟は首里城正殿の工事現場そのもの、もう 1 棟は木材を乾燥させるために使われていると近くのボランティアガイドが教えてくれる。

首里城と言えば「守礼門」が有名で、この門が世界遺産だと勘違いしている人も多い。しかし残念ながら世界遺産ではない。守礼門をくぐって少し先にある「園比屋御武嶽石門」という小さな古い石門が世界遺産になっている。

焼失した首里城も世界遺産ではなく、地下の遺構が世界資産なので遺構は焼失からは免れた。

【世界遺産の園比屋御武嶽石門】

昼食に沖縄そばを食べる。ソーキそばの具が豚バラ肉になっただけだが、沖縄そばの方がスタンダードでバリエーションも豊富になっている。

第二章　北大東島

■北大東島に着く

沖縄本島からほぼ東に 360km 離れた場所に北大東島と南大東島がある。私たちは那覇空港から約 50 分間プロペラ機に乗り、北大東島に着陸する。

小さな島にギリギリ造った空港なので滑走路が短く、1500m しかない。そのために飛行機は着地と同時に急ブレーキをかける。こんなに急に止まる着陸は珍しい。

【北大東島空港】

空港には宿の人が車で迎えに来てくれており、空港を出るとのどかな田園風景になる。

運転する女性に話を聞くと、島の人口は約 550 人、島一周道路は 13.5km。畑はほとんどがサトウキビ畑で、この島の主要産業になっている。大きな製糖工場があり、収穫時期は労働力が不足するので多くの季節労働者を受け入れるという。

■ハマユウ荘

本日泊まる宿「ハマユウ荘」に着く。宿の造りが凄い。私もノブさんもその名前から小さな民宿を想像していたが、完全にその想像を超えている。民宿というよりもリゾート施設と言った方が良いかもしれない。

四角い広い中庭を 4 つの 2 階建ての鉄筋コンクリートの建物が取り囲んで建っている。中庭に面した 2 階の廊下は回廊のようになって繋がっている。その造りは宮殿のようだが、コンクリートの打ちっ放しの外壁なので、きらびやかではない。むしろそれが堅牢そうに見えて、台風が多いこの島ならではの雰囲気がする。

【ハマユウ荘　右奥が別館】

島は水が貴重なのに大浴場もあるから驚きだ。ツインルームの部屋はシンプルで清潔感がある。
隣には別館があり、サトウキビの季節労働者を受け入れるため全てシングルルームだという。

期待しないで偶然に出会う感動は何倍にも増幅されるという私の持論「期待と落胆、偶然と感動」を私が時々口にしているので、ノブさんも覚えたらしく、彼は「これこそ偶然と感動だ！」と声をあげている。彼は感動ハンターに化している。

■立派な役場と土俵

夕食まで散策に出掛ける。宿の近くには立派な役場がある。この役場だけ見ていると秘島に来た気がしない。この辺りが島の中心街なのだが、中心街と言うほど建物は多くない。

石造りの鳥居をくぐると、「大東宮」という神社がある。まずは旅の安全祈願の参拝をする。
鳥居や参道は立派だが、本殿というような建物はなく小さな社がある。その隣に大きく立派な屋根の相撲の土俵がある。立派な観客席もあり、単に相撲を取ると言うよりも相撲は神事なので、島民そろって神に奉納するのだろう。

【北大東村役場】

【大東宮の社と屋根付き土俵】

■北大東島の夜

ハマユウ荘には広くて立派なレストランがある。島民の憩いの場にもなっているようで、私たちが入ると地元民らしい先客たちが盛り上がっている。
夕食にはマグロ、ハマチ、イカの刺身が出てきた。どれも厚切りで嬉しい。島は自給自足がほとんどで、海で獲れた魚介類がその日のうちに食卓に並ぶから新鮮で美味い。それは辺ぴな島ほど顕著なので離島・秘島の旅の魅力になる。秘島ハンターの役得だろう。

レストランで食事を終えて、中庭を通り抜けて部屋に戻る途中で後ろを振り向くとレストランの向うに灯台の灯が見える。
しばらく見ていると、灯台は概ね 30 秒に一回光をこちらに照射してくることが分かる。周りには何もなく静まりかえっており、この灯りを見ながら一杯飲むのもまた風情がある。さすが太平洋の秘島、幻想的な島の夜を演出してくれる。

【ハマユウ荘のレストランと灯台の灯り】

■何もない港

朝起きると小雨が降っている。秘島ハンターたる私たちは歩いて島内一周を考えていたが、作戦変更でレンタカーにする。

「北港」にやって来る。港といっても広い桟橋だけで、係留ロープを掛けるフックがあるだけで港湾設備は何もない。波や風の被害を考えると何も造らないのが正解のようだ。防波堤もないから桟橋には波がもろに当たる。そのため断崖絶壁の高い桟橋になっている。海を覗き込むと恐怖感さえをも覚える。

【↑北港の桟橋　断崖と私】　　【↓広くて何もない桟橋】

沖縄本島との間を貨客船が週に１～2 便就航しているが、港湾設備がないから荷物の積み下ろしにはクレーン車がやって来て吊り上げ下げをする。乗船客もゲージに入れられて荷物と同じように吊り上げ下げされて乗船下船をする。これぞ秘島というシーンが想像できる。

秘島ハンターならばそんな乗船下船をしてみたくて船での上陸を検討したが、観光案内所に電話で聞いたら、頻繁に欠航するというので断念した。実際にこの港を見てそれを実感する。

北大東島にはこんな港が全部で 3 港あり、波と風によって港を選んで貨客船が接岸させる。このサイズの島は通常は 1～2 港だが、3 港あるのは珍しい。

「西港」にやって来る。桟橋は北港と同じで何もないが、ここには遺跡がある。

遺跡といっても古代遺跡ではない。この島はかつてリン鉱石の採掘が主要産業だったので、その痕跡が廃墟になって残っている。いかにもインスタ映えしそうな貯蔵庫跡だが、私たち以外には誰もいない。

【西港のリン鉱石の貯蔵庫跡】

西港の高台の公園には「国標」がある。国標とはこの地が日本の領土であるという宣言が書かれた標で、私は生まれて初めて見る。いやその存在さえも知らなかった。

「上陸公園」と書かれた場所にはベンチと説明看板がある。1900 年に八丈島から開拓者たちが来た時に上陸したという場所で、砂浜ではなく岩場それも崖になっている。こんなところから上陸したのかと驚いてしまう。

それにしても北大東島から八丈島までは 1134km もある。124 年前に漂着ではなく開拓に来るということは戻らない覚悟だったのだろう。

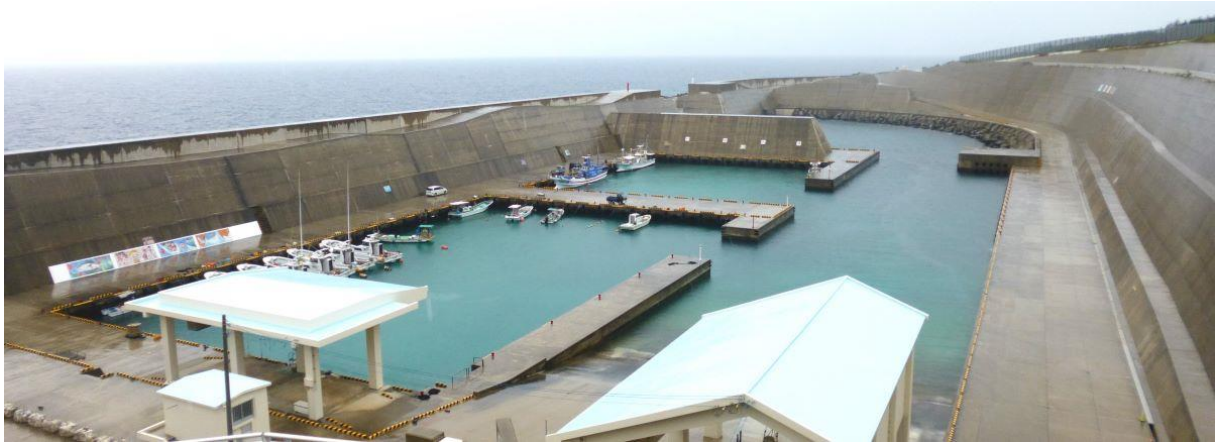
【上陸公園の上陸地】

■漁港

「北大東漁港」という新しく立派な漁港がある。

今まで見てきた港は比較的大きな貨客船の着く港なので断崖のような高い桟橋だったが、ここは漁港なので小さな漁船が出入りし、漁船を係留する入り江も必要になる。そのため堅牢で高い防波堤を造り、その防波堤に守られて入り江も港湾設備も漁協の建物もある。

防波堤の高さは、ぱっと見ても 20m くらいはあるだろうか。ここまでしないと強烈な波や風から漁船を守れないのだろう。この漁港は 2008 年から 10 年かけて造ったという。それにしてもあまりにも立派だ。



【北大東漁港】

■島の風景

空港の東側の海岸に「沖縄最東端の碑」がある。沖縄には島がたくさんあるが、この場所が沖縄県の最東端と書かれている。沖縄本島から 360km も東にあるのだから、不思議ではない。

近くには「秋葉神社」がある。ここにも相撲の土俵と観客席がある。相撲は沖縄の文化ではないので伊豆諸島、八丈島から伝わったものなのだろう。

島の中心部近くに灯台がある。昨夜、30 秒間隔で灯りを見ていた灯台で、2 島合わせてこの場所が最も高い場所になっているから南・北大東島で唯一の灯台だという。

灯台の横には「第二大隊守備の碑」と陣地跡の洞窟がある。第二次世界大戦末期に旧日本軍の守備隊が配備されたと看板に書かれている。こんな離島にも戦争の跡があることに驚く、そして洞窟の中には錆びた機銃のようなものが置かれていた。

【秋葉神社】

【灯台横の第二大隊守備の碑と陣地跡の洞窟】

■民族資料館

島内一周の最後に「民俗資料館」を訪れる。入館料 500 円は少し高いと思ったが、時間もあるので入館してじっくりと見学する。

資料館の展示は実に充実している。地質学的な島の成り立ち、1900 年からの開拓の歴史、島の自然や現在の産業などを紹介している。とても詳しいが、とても見やすいので良く理解することが出来た。

4 人の専門家が手分けして制作に関わったということで、その仕事に感心してしまう。

私は日頃「物事を本当に理解している人ほど簡単に分かり易く説明する」と言っており、逆に「理解していない人ほど説明が下手で難しく説明する」と、まさしくそれを実感する。

南大東島の南 150km 沖に「沖大東島」という島があって、かつてリン鉱石の産地で 2000 人も住んでいたが、今は無人島になっている。その理由は沖大東島の海域が米軍の射撃爆撃訓練区域になっているからだと書かれている。

ここでも米軍か。アメリカにとって戦争は終わっていないのか、始めようとしているのか。

■大東寿司

島一周ドライブは午前中で終了し、ハマユウ荘のレストランで昼食を食べる。

「大東寿司」と呼ばれる名物料理を注文する。地魚を甘口の醤油で浸けて酢飯に乗せて握った寿司で、私は同じようなものを伊豆大島で食したことがある。伊豆大島の寿司はベッコウ寿司と呼ばれていてピリッと辛かったが、大東寿司は甘口に仕上がっている。

【大東寿司】

ひょんなことから私は店員に大東寿司のルーツのベッコウ寿司の話をすることになる。

「伊豆諸島は、昔は静岡県だったので、静岡と言えばワサビが有名だが、ワサビの栽培には綺麗で大量な水が必要なので、島ではそれは叶わない。そこでピリ辛の味を出すためにトウガラシ入りの醤油に刺身を漬け込み寿司にした。それが開拓民によって南・北大東島に伝わった」と話をする。

すると店員は「甘くなったのはサトウキビの産地だからだね」と今度は私に教えてくれた。

■北大東島空港にて

空港売店で月桃風味のポップコーンを肴にポテト焼酎を飲み、売店のお姉さんと話をする。

彼女は「この島ではサトウキビ以外にジャガイモも栽培しており、美味しいよ」と言っている。私は「そんなに美味しいなら、食べてみたいね」と言うと、しばらくして彼女は「冷凍したものを電子レンジで温めたのですが、この島で採れた正真正銘のジャガイモです」と言ってメニューにないジャガイモを出してくれる。

私たちは感激して、アツアツのジャガイモを頬張る。彼女の親切心こもったジャガイモは焼酎にも合う。天にも昇る気持ち、これは飛行機に乗る前に飲み過ぎて昇天しそうだ。

私たちの隣のテーブルで飲んでいる地元のおじさんが「今度は船で来たら」と言っている。私が「あのクレーンでの吊り上げですね」と切り返すと、おじさんは「あの揺れがいいんだよ」と笑っている。

秘島ハンターを自負する私にとっては、その揺れを一度は経験してみたい。それにしてもそんなに揺れるのか。

【50 人乗りのプロペラ機】

■日本一短い空路

南大東島に行く飛行機に乗る。北大東島から南大東島は 8km なので本来ならば 5 分もかからないが、飛行時間は 20 分だと客室乗務員がアナウンスしている。

8km だと離陸して即座に着陸動作に入らなくてはならない。普天間基地で見たオスプレイならいざ知らず、普通の旅客機ではそんな芸当はできない。

離陸動作が完了するためには、ある高度まで上昇する必要があり、そして機体を立て直して着陸動作に入るので距離と高度が必要で 20 分かかる。

南･北大東島に来る飛行機は那覇から飛び立って約 50 分間飛行して南大東島もしくは北大東島に着陸する。機内清掃をして別便として北大東島もしくは南大東島に飛び、この時間が 20 分の飛行時間になる。さらにまた機内清掃をして那覇に戻る。先にどちらの島に着陸するかは曜日によって変えている。

20 分間飛行も含めて、変則的な航空路なので航空会社としては止めたい意向がある。次のダイヤ改正で、20 分間飛行を廃止して那覇・北大東島と那覇・南大東島の 2 つ航空路にする。

南・北大東島間を往来する島民は少ない。しかし観光客にとっては 2 島間の航空路がなくなると両方の島に行くには那覇に戻る必要がある。それを防ぐには両島間の船便の充実しかない。

第三章　南大東島

■南大東島に到着

南大東島空港に着陸する。空港ビルは北大東島よりも少し大きい。そしてまた今夜泊まる「ホテルよしざと」の車が迎えに来ている。

運転する女性にまた島のことを聞くと、人口は約 1300 人、島一周道路は 20.8km だという。面積は周囲の 2 乗に比例するので面積も人口も北大東島の 2 倍強になる。

ホテルは鉄筋コンクリート 4 階建てで、台風に強そうで頑丈そうだが何の変哲もない。北大東島のハマユウ荘のような感激はない。

まずは島内の散策に出掛ける。宿の周辺には村役場や駐在所、小中学校、商店が並んでいる。当然のように村役場は北大東島よりも大きい。この辺りは中心街になるのだが、繁華街と呼ぶには多少無理がある。

【ホテルよしざと】

【南大東村役場】

その中心街を少し歩くとすぐに郊外になり、そして溜池が多くある。道端にはカエルの死骸がたくさんあるので、溜池から道に出て交通事故死したようだ。この光景から島なのに農業用水が豊富なことが分かる。

ラム酒の工場がある。ラム酒はカリブ海などの熱帯地方で栽培されるサトウキビを使った酒なのでこの島には最適な酒だろう。

工場には「南大東島空港」の表示があり、小さな看板に「グレイスラム」と書かれている。

中に入り不愛想な従業員に話を聞くと、ここは元々南大東島空港のターミナルビルだったが、建物はそのままでラム酒を製造しているという。それにしても看板もそのままとは恐れ入ってしまう。

試飲をさせてもらう。アルコール度数 40 度はかなり強烈だが、試飲で水割りを頼む訳にもいかず、「やっぱりストレートに限るね」と言いながら飲み干す。口の中が熱くなるのが分かる。

ホテルに戻り夕食になる。マグロとイカの刺身にフーチャンプルで、ご飯と味噌汁がお代わり自由で、仕事で来島している宿泊客が多いからだろう。

北大東島でもそうだったが南大東島に来ても観光客にあまり会っていない。来島者の多くは工事業なのだろう。

■島の海岸

翌朝、レンタカーを借りて、島一周のドライブに出掛ける。まずは「西港」を訪れる。北大東島の港とよく似た何もない桟橋だけの港だ。わずか 8km しか離れていない兄弟のような島だから当たり前か。それにしても“ワイルドだぜ”という言葉が実に合っている。

【西港の桟橋】

西港にはキャンプ場がある。まさかと思ったが、キャンプをしている人がいる。それも 1 人キャンプで、のんびりと島の時間の流れを楽しんでいるかのようだ。

キャンプ場の隣に「開拓百周年記念碑」がある。1900 年に開拓が始まったので、この碑は 24 年前に建てられた。「金比羅神社」もあるので、旅の安全祈願をする。

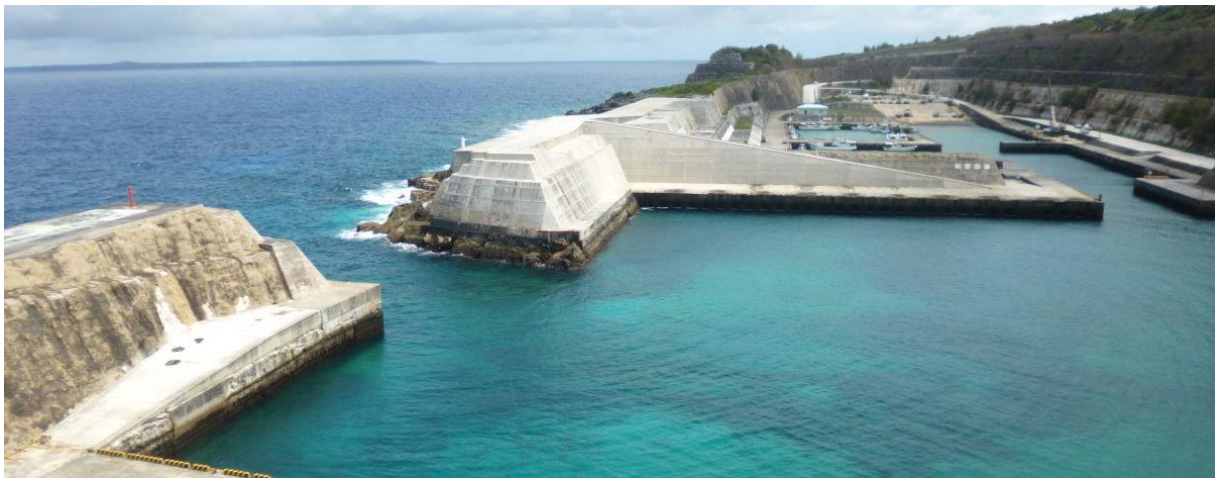
「塩屋海岸ブール」は自然の地形を利用した天然のプールで、砂浜がないので島の子供たちはここに来るのだろう。それにしてもワイルドだぜ。

【西港の開拓記念碑とキャンプ場】

【塩屋海岸ブール】

「亀池港」も「北港」も北大東島でも見てきた港の景色同様で感激もない。最初はこの景色に驚き感激していたが、すっかり慣れてしまい、非日常が日常化していることに気が付く。

漁港の「南大東漁港」も北大東島と同じで頑強な堤防に囲まれている。島の北側なので平べったい北大東島がはっきり見える。



【南大東漁港　平べったい北大東島が左に見える】

■島の内陸

島の中央付近のやや高くなった場所に櫓で組んだ「日の出山展望台」がある。展望台からはサトウキビ畑と溜池が見え、荒地はほとんどない。

【日の出山展望台からの眺望】

地図では「秋葉神社」という神社が近くにあるはずだが、なかなか見つけられない。ようやく見つけた神社は、小高い丘の森の中にひっそりと鎮座している。秋葉神社は確か北大東島にもあった。兄弟のような島なので分祠したのだろうか。

秋葉神社近くに「秋葉地底湖」があるはずだが、これも見つけられない。島のパンフレットには地底湖探検ツアーが載っているので、あるはずだがなかなか見つけられない。

Google map で調べると、畑の中にポツンとある林を指している。個人の所有地で許可が必要と書かれており、ここでやめておく。

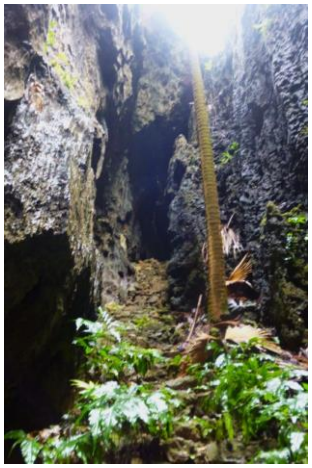
【秋葉地底湖があるらしい林】

廃線になった線路がある。この島は今でもサトウキビが主要産業だが、トラック運搬が普及する前の時代にはサトウキビ運搬用のトロッコ列車が走っていた。

その列車の名前が「シュガートレイン」で、実際に運行していた車両がホテルの近くの運動場前に展示してある。かなり錆び付いていて保存状態は良くないが、この島の過酷な自然環境を伝えるにはもってこいだろう。

【廃線跡のレール】

【シュガートレインの実物】



【バリバリ岩】

道路沿いに「バリバリ岩」という大きな看板がある。駐車場に車を停めてジャングルの中の細い道を小枝かき分け歩いて行くと、左右に大きな岩が現れて割れ目を作っている。割れ目の空間に１本のヤシの木が立っている。偶然とはいえ面白い。その先はトンネルになっていて、トンネルをくぐるとちょっとした空間が広がっている。最後は突き当りになっており暗い。小さな鍾乳洞という感じで、石灰岩が水の浸食を受けて鍾乳石を造っている。

ここには昼頃に来たほうが良いということがパンフレットに書かれていたが、その意味がここに来て分かった。真上から陽光が射してスポットライトのように照らしている。

昼食はホテルの近くの食事処で「大東そば」を食べる。味も見た目も那覇で食べた沖縄そばと同じようだが、何が違うのだろう。

昼食を食べて「大東神社」に行く。ホテルのスタッフから「大東神社に行くならば蚊が少ない昼頃が良いよ」と聞いていたので、この時間になったが、確かに神社はうっそうとした林の中にあって木々に覆われている。

ここにも立派な相撲土俵と観客席があって、歴代の大関や優勝者の写真なども飾ってある。

【大東神社の土俵】

■驚きの施設

「星野洞」という鍾乳洞がある。星野さんの土地で見つかったのでそのような名前がついているが、中に入るととても個人の所有物には到底思えない立派な鍾乳洞が広がっている。パンフレットには東洋一美しい鍾乳洞と書かれている。

私は国内外各地の鍾乳洞を見てきたが、美しさは東洋一かも知れない。ノブさんはこのような鍾乳洞は初めてらしく「偶然と感動だ！」と叫んで、再び感動ハンターに化している。

上から鍾乳石の柱が垂れてくるツララ状のタイプと、下から柱が成長するタケノコのようなタイプと、その上下が繋がって柱になったタイプと、それらが全て揃っている。さらに石灰の質の違いで色が変わっているものも見られる。

100 年ちょっと前に人が移り住んできた太平洋の大海原の小さな島で、さらに個人の所有地だから手付かずの自然がそのまま残っている。

【星野洞】

鍾乳洞の近くに 9 ホールのショートコースのゴルフ場がある。

初心者のノブさんに「南大東島でゴルフなんて人生最大の思い出で、自慢話になるよ」と焚きつけるとまんざらではなさそうだ。“豚もおだてりゃ木に登る”とはちょっと言い過ぎか。とにかくコースに出る。

南大東島でのゴルフは、私のゴルフ人生の金字塔になった。

【大東ゴルフ倶楽部にてゴルフに興じる】

■旅行社のツアー

ホテルに戻ると、食堂には 8 人の団体客がいて中年の女性添乗員が世話をしている。昨日はいなかったから本日の飛行機で来たらしい。

添乗員から話を聞くと、岡山の山陽新聞旅行社のツアーで、2 泊 3 日で南・北大東島を巡るという。

私が「よくこんな離島に来るツアーがありますね？」と言うと、彼女は「うちは沖縄の離島をほぼ制覇していますよ」と、秘島ハンターを自負する我々を前にして自慢そうに答える。
秘島ハンターとしてはツアーの値段を知りたかったが、さすがにここで聞くわけにはいかず、部屋に戻ってインターネットで調べると 15 万円くらいで募集していた。

■電動アシスト自転車
本日は午後に那覇に戻るので、半日を利用して電動アシスト自転車を借りて島内を散策する。

気象台にやって来る。気象情報で「南大東島・・・」と良く耳にするフレーズの発信場所になる。そして朝 8 時 30 分にバルーンを飛ばすから、あの 8 人のツアー客たちも来ている。
バルーンとは気象観測気球のことで毎日飛ばしているが、あたかも特別なイベントのようにパンフレットに書かれている。
8 時 30 分ちょうど、コンテナ屋根が開いてバルーンが放たれてゆっくりと上昇していく。バルーンは白くて小さいので、曇り空の中に吸い込まれていく。
それにしてもこれを毎日上げているということは、消耗品なのでコストを意識して、環境問題も考慮しないといけない。気象庁は地味ながら大変な仕事をしていると感心する。

【気象台でのバルーン打上げ】

西浜に立ち寄り、キャンプ場を覗くと今日もあのテントが張ってある。

電動アシスト自転車のバッテリーの減りが早いので、節電のために上り坂以外は電源オフにする。そのため電源オンにした時の喜びはひとしおで、改めて文明の利器の威力を感じる。
サトウキビ畑ばかり続く。昨日も同じ景色を見てきたが、車に比べて自転車は長い時間見ることになり延々と続くように思えてくる。移動手段によって景色の感じ方が変わることを実感する。

「ふるさと文化センター」に立ち寄る。北大東島の民俗資料館のような期待をしたが、古い衣装や道具をただ展示しているだけで、全く興味を引かない。入館料 500 円と 200 円の差か。

■那覇へ
那覇へ戻るために南大東島から北大東島に飛び、全員降りて機内清掃をして別の便になって那覇に向かう。今後はこの経験ができないかと思うと残念だ。

那覇空港で、羽田空港から来た妻と合流して 3 人で空港内のレストランで打ち上げを行う。いや、妻にとっては打ち上げではなく前夜祭か。
ノブさんと別れて妻と空港近くの東横インに泊まる。21 時まで生ビールや泡盛が飲み放題で、部屋は広くて新しい。このツインルームが 2 人で 11000 円とは、こんなことで感動してしまう。

第四章　与那国島

■初めての与那国島

与那国島空港に到着し、ヨットマンのヨコさんと山ガールの姉さんと合流する。

私たち夫婦も含めた 4 人は、8 年前の地球一周の船旅で一緒に旅をした。今回ヨコさんは八重山諸島を、姉さんは那覇の同窓会に参加して沖縄本島周辺の島を、それぞれ巡って与那国島にきた。4 人とも与那国島は初めてで、レンタカーを借りて秘島ハンター4 人旅が始まる。

空港近くの標高 85m の岩山「ティンダバナ」に登る。サンゴの隆起と浸食で出来た山で頂上付近に岩が突き出て屋根のようになっている所があり、そこから祖納集落が一望できる。珍しいことに岩の隙間から水が湧き出ている不思議な山だ。

【ティンダバナから見た祖納集落】

【ティンダバナ頂上付近の岩屋】

湧き水があって雨風が凌げるので人間が暮らしていた形跡もあり、15 世紀末に実在したらしい女酋長サンアイ・イソバの住居があったとされている。

イヌガン伝説の場所だと書かれている。その伝説とは、久米島から琉球王に貢物を送る船が漂着し、その一行の中に女と犬がいて犬が日々男たちをかみ殺し、最後は犬と女がこの場所で暮らしたという、おどろおどろしい伝説だ。

しかしこの伝説は、かなりの部分が事実だったと私は思う。理由は“久米島から”と明確になっていることで、普通なら漂着したとしか書かない。ただし犬はおそらく一行の中で最も強いか悪賢い人間だったのだろう。

この岩だけで、与那国島の歴史を感じる。そういえば歴史が全て分かっている南・北大東島では伝説は全く存在しなかった。

昼食の時間になる。秘島は食堂や商店が少ないのでヨコさんが来島前に調べてくれていて、いかにも与那国島という食堂に入り「八重山そば」を食べる。

沖縄本島の沖縄そば、南大東島の大東そばと基本的には同じようだが、ここは八重山諸島で沖縄本島とは歴史文化で一線を画すので、何か違うのだろうが私には分からない。

【昼食を食べた楓食堂】

■Dr.コトー診療所

「Dr.コトー診療所」にやって来る。テレビドラマのオープンセットが入場料 300 円で公開されている。診療所なので待合室、受付、診察室があり、ドラマと同じになっている。

【Dr.コトー診療所のオープンセット】

Dr.コトー診療所のドラマは 2003 年から始まったので、このセットはそれに合わせて造られた。当時の建設費は約 2000 万円だったとパンフレットに書かれている。

鉄筋コンクリート製の建物で完成当時は真新しかったに違いないが、テレビ局の美術スタッフが古く見せる工夫をした。しかし単に古くしただけでなく細部にこだわっている。例えばドラマでは与那国島ではなく志木那島という島名なので、ポスターや掲示物、表彰状に至るまで志木那島になっている。

【待合室】

【玄関と受付】

私と妻は 2022 年 12 月に公開された映画を観てから、是非与那国島に行きたいと思っていたので、このセットは懐かしくもあり感激もある。

そんな私たちよりも遥かに感激している母娘の 2 人連れが熱心に写真を撮っている。娘は 20 才代、母親は 50 才くらいだろう。話を聞くと 2 人とも Dr.コトー診療所の大ファンで、娘は感極まって涙ぐんでいる。彼女たちはこの診療所を見るためだけに山形から来たという。

与那国島は日本の領土の中で最も東京から遠い島で、東京から 2000km も離れている。山形から東京に出るのもそれなりに大変なので、彼女たちの熱い想いが伝わってくる。

診療所には屋上があり、急な階段だが登ることができる。目の前には海が広がり、そこから見る与那国の海はドラマの世界そのものになっている。

■日本最西端

与那国島と言えば、日本の最西端なので「日本最西端の碑」がある。

当たり前のことだが、日本には 4 つの最〇端がある。しかし一般人が行くことができるのは最西端だけで、最北端は北方領土の択捉島、最東端は南鳥島、最南端は沖ノ鳥島で普通には行けない。

【日本最西端の碑と私たち 4 人】

【日本最西端の碑の隣にある灯台】

ここから台湾までは 111km なので、晴れていれば台湾が大きく見えるはずだが、残念ながら本日は曇りで島影さえも見ることができない。ただし展望台の壁に台湾を臨む景色が描かれている。私はその絵を見ながら 1 カ月前に旅していた台湾を思い出した。

台湾には富士山よりも高い標高 3952m の玉山がある。日本統治時代に日本の“新しい高い山”なので新高山と名付けられた。ご存知の人も多いが真珠湾攻撃の暗号「ニイタカヤマ ノボレ」で使われた。その新高山をはじめ高い山がたくさんあって、こんなに大きく見えるのかと少し感激する。

昨日までいた平べったい南・北大東島とは全く様子が異なる。

【日本最西端の岬にある展望台の壁に描かれた絵　海の向こうに台湾がある】

日本最西端の近くの「ナーマ浜」に降りる。家族連れが多く集まっており、3 人の子供を連れた若い母親に話を聞く。

本日は旧暦の 3 月 3 日に行う沖縄の女児の節句「浜下り（はまうい）祭」で、今は家族で行く潮干狩りになっているが、昔は女性だけで海岸へ行き海水でケガレを落とす行事だと教えてくれる。

その彼女は、「実は私も、昨年越してきたので、初めての祭なので初参加です」と笑顔で応えてくれる。

■島の情報

与那国島は当初私たち夫婦だけで行こうとしていたが、後からヨコさんと姉さんが加わった。しかし人気の島なので私たちと同じ宿がとれずに、別の民宿になった。

その民宿に立ち寄り、民宿の女将から島のことを教えてもらう。

島の人口は約 1700 人、そのうちの 1/3 は自衛隊の隊員と家族だという。既婚の自衛隊員は家族帯同で赴任しており、様々な島の行事に参加してくれて頼もしく嬉しいと言っている。

先ほどのナーマ浜で話した若い母親も自衛隊員の奥さんとすると、合点がいく。

さらに世界最大の峨「ヨナグニサン」は外せない。そして「久部良バリ」という場所はちょっと悲しいけれど見た方が良いとアドバイスをもらう。

■日本最後の夕日が見える丘

日本最西端の碑がある岬と港を挟んだ対岸に「日本最後の夕日が見える丘」がある。

しかしこのネーミングはおかしい。最西端の碑がある岬の方が、間違いなく最後に日が沈むから理屈に合わない。まあ、ここは日本最西端の秘島だ。細かいことは言わないでおこう。

その日本最後の夕日が見える丘の近くに民宿の女将が言っていた「久部良バリ」があり、看板には「琉球王府は 15 歳以上の全ての男女に人頭税をかけた。その影響は与那国島にも及び、島では人減らしのために妊婦を集めてこのバリ（岩の割れ目）を飛ばせた。妊婦たちは必死に飛んだが、転落や流産に至った」と書かれている。

割れ目の幅は 2m くらいでかなり深い。落ちれば流産どころか本人も生きていないかもしれない。女性陣は「妊婦でなくてもこれは飛べないよ」と言っており、ヨコさんも私もうなずく。

【久部良バリ】

このとんでもない悪法、風習を廃止させたのが、あの岩山ティンダバナに住んでいた女酋長サンアイ・イソバだという。

女性ながらいや女性だからか、私は良くやったと言いたい。15 世紀末のことだから日本は戦国時代で、男たちは日々殺し合いをしてそれを美徳としていた。

私たち夫婦の泊まる宿の食堂は居酒屋でもあるので、宿泊しない 2 人も加えて夕食を食べる。料理はもちろん地産地消で、カジキマグロのステーキと刺身、野菜類が並んでいる。

夕日が綺麗になってきたので徒歩 5 分の日本最後の夕日が見える丘に行く。

多くの島民が散歩がてら夕日を見に来ている。島民にとってはここで夕日を見ることが日課になって一日の締めくくりにしているのだろう。

つまり“本日最後の夕日を見る丘”かもしれない。それでは面白くないので与那国島らしく“日本最後の夕日が見える丘”にした。そうは考えるとなかなか良いネーミングかもしれない。

【日本最後の夕日が見える丘からの夕日】

■クルーズ船

翌朝、ヨコさんたちを迎えに民宿に行くと、クルーズ船が沖合に見える。沖合に停泊してゴムボートで港までピストン輸送をしている。

フランスのクルーズ船で、港近くの多目的集会施設で歓迎イベントを行っている。私たちはクルーズ船で知り合った仲間なので、外国での歓迎イベントには慣れているが、日本の離島ではどんなことをしているのか興味もあってその施設に行ってみる。

施設の前では天然記念物の与那国馬が出迎えてくれる。この小さな馬も歓迎イベントに駆り出されたらしい。館内では三線の演奏や民族衣装の展示、物品販売もしている。

大阪からこのイベントのために手伝いに来た通訳の若い女性と話をする。私たちが地球一周の船旅で知り合い今回は秘島ハンターで来たことを話すと、彼女は驚きそして外国の島に是非行きたいと目を輝かせていた。彼女の人生に一石を投じたか。

【歓迎してくれる与那国馬】

【クルーズ船】

■ヨナグニサン

世界最大の蛾「ヨナグニサン」を飼育している「アヤミハビル館」に立ち寄る。他に入場者がいないようで、女性スタッフが対応してくれる。まずは与那国島とヨナグニサンの紹介ビデオを観る。こういったビデオはその土地をより理解し旅を楽しむことに繋がるので、私はなるべく観るようにしている。

ビデオ視聴後、館内の展示物を一通り観終わるが、生きている世界最大の蛾が見当たらない。彼女に場所を聞くと、「先ほど観ていましたよ」と言っている。私は「あれは標本じゃないの？」と聞き返すと、彼女は「ヨナグニサンは動かないからケースに入れる必要もなく“触らないで”、“息を吹きかけないで”と注意書き貼っています」と説明してくれる。

私たちは標本と思って通過した生きたヨナグニサンを再度観るために順路を戻り、今度はしげしげと観察する。羽根を広げた大きさが私の手のひらくらいなので 20cm くらいだろうか。思っていたより小さく感じて、世界最大という言葉に期待し過ぎたようだ。

ヨナグニサンはモスラのモデルになったというから、何となくモスラに似ている。いやモスラが似ているのか。

【ヨナグニサンの蛾と幼虫】

■島の東側

昼食は与那国そばを注文する。女店主が 1 人で切り盛りするので 30 分以上待たされる。

「これが島時間なのだね」とヨコさんが言うと、姉さんは「そうね、最西端の島だからね」と分かったような、分かんないようことを言っている。なぜか妻もうなずいている。

与那国そばは昨日食べた八重山そばとほぼ同じで違いがよく分からない。店の人に聞くと、この店の麺は与那国島唯一の製麺所の麺を使用しているという。まあ味が良いから何でもいいか。

午後は島の東側を訪れる。最西端の島なので西側に興味がいくが、景勝地は東に多い。

「立神岩」は与那国島のポスターに頻繁に登場する岩で、確かに“神が立っている岩”のように見える。神が岩に化身して島の時間を楽しむかのように立っている。

【立神岩】

与那国島最東端の「東崎（あがりざき）灯台」では 4 頭の与那国馬が草を食べている。

どうぞ写真を撮って下さいとポーズをとっているモデルのようで、これを見た妻は、「この 4 頭が、今日の当番みたいね」とつぶやく。

いくら天然記念物の与那国馬でもそれはないだろう思いつつも、確かに他の馬は遠い場所にいるのに、この 4 頭だけが灯台にへばりついて草を食べている。人間に命令されてか、いや天然記念物としての使命感を感じて 4 頭が手を挙げた、いや前足を挙げたのかもしれない。

【東崎灯台と 4 頭の与那国馬】

ヨコさんが「美味しいコーヒーを飲みたいね」と言って祖納集落の喫茶店に入る。

店内は洒落た造りをしていて、日野正平が NHK の自転車の旅番組で 2023 年春に来た時のサインが飾ってある。そういえば私たちが泊まった宿にも同じサインがあった。

私たちは美味しいコーヒーを飲みながら、ゆっくりと流れる島時間を味わう。まるで時計の針が止ったような時間を過ごす。

【喫茶店「パネス」の内部】

■海底遺跡

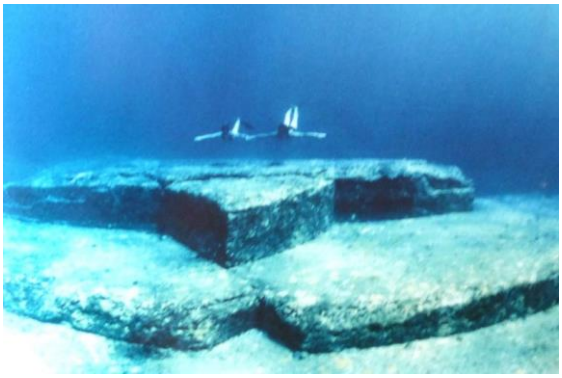
私が見ていた与那国島の写真集に「海底遺跡」が載っている。立神岩の近くの海底なので立神岩もその遺跡の一部かもしれない。

私はヨコさんに「これ、知っている？」と聞くと、彼は「それ調べたけど、自然物らしいよ」と言う。しかし写真を見る限り私には遺跡に見える。

スマホで調べると、琉球大学が調査して遺跡として申請したが、文化庁が認めなかった。理由は文字や人工物が確認できないからだいう。

確かインカ文明も文字がなかった。そして写真はマチュピチュのコンドルの神殿に似ている。

これは面白い。宿題を出されたかもしれない。



【海底遺跡？の写真】

■人面岩

「人面岩」という岩があるので物見遊山で見物に行く。車を停めて歩いて入って行くと、道は徐々に細くなってくる。もう 20 分くらい歩いているが、人面岩にたどり着かない。

【人面岩】

Google map では近くにあるはずだが、道は遠回りをしている。ここまで来て戻るのは秘島ハンターのプライドが許さずに、さらに進んで行く。すると藪の中に人面岩と書かれた小さな看板を見つける。

やっと人面岩と対面になる。

しかし「これが人面岩？ちょっと無理があるかな」と誰もが言っていた。

■最後の晩餐

夕食は宿の近くの「海人食堂」で食べる。人気店なので民宿の女将からは予約しないと入れないと言われ、最後の晩餐を盛大に行うべく夕方 5 時に予約した。

刺身はカツオ、セイイカ、キハダマグロ、この近海ではカジキマグロがよく獲れるというので、肉ではなくカジキマグロのステーキとそのメンチカツ、その他沖縄料理を豪勢に注文する。

刺身は厚切りで美味い。カジキマグロ料理もどれも美味い。

私たちが舌鼓を打っている間に観光客や仕事で来ている人々で店内は満席になった。

【海人の店内】

【刺身 3 点盛り】

満足感たっぷりの最後の晩餐が終わり、秘島ハンターたちは店を出る。

本日はヨコさんと姉さんが泊まっていた民宿のシングルルームが満室でツインルームしか取れなかった。そのため女性陣は民宿のツインルームに泊まり、男性陣は昨日私たち夫婦が泊まったツインルームに泊まることになる。

人気の島なので最近観光客が多くなったのか、元々宿泊施設が少ないのか、よく分からない。いずれにしても、たまには夫婦別々に他の人と泊まるのも面白い。

■最終日

最終日は石垣島までプロペラ機で約 30 分、石垣島から羽田空港までが直行便で約 3 時間というフライトで帰宅する。飛行機の中で、各島のことをつらつら思い出す。

沖縄本島は観光名所がたくさんあるが、今回巡った場所はやはり戦争と米軍か。

北大東島はハマユウ荘と交流館が良かった。南大東島は鍾乳洞とゴルフだろう。どちらの島も海岸線と港が特徴的で、平べったい島の自然に対する人間の付き合い方が面白い。

与那国島は Dr.コトー診療所と日本最西端だろう。台湾との交流もあったはずだが、そこまで踏み込めなかった。その意味で海底遺跡も関係するのかもしれない。

離島 3 島はサトウキビと漁業が主力産業で、実にのんびりしていてとても癒された。与那国島が最も観光地化していて、その逆は北大東島だろう。サイズはレンタカーの走行距離で判断できる。北大東島は 34km、南大東島は 68km、与那国島は 92km になった。

グルメはやはり刺身、そしてカジキマグロ料理か。麺はソーキそば、沖縄そば、大東そば、八重山そば、与那国そば、その食べ比べの旅も面白いかもしれない。

離島はどの島も全て現金払い、私は離島やへき地の訪問には必ず郵便局のキャッシュカードを持参するが、これが今回も功を制した。

どの島も過酷な自然、夏の暑さと台風が難敵と言っていた。夏に来るには覚悟が必要だろう。

第五章　旅の記録

■旅の記録

実施は 2024 年 4 月 6 日（土）～4 月 13 日（土）の 7 泊 8 日、その行程を示す。

・1 日目　ノブさんと空港で落ち合い、羽田空港 7 時 30 分→那覇空港 10 時 15 分、
レンタカーを借り高速道路 SA でソーキそばの昼食、沖縄本島最北端「辺戸岬」
17 時から那覇「あんがま国際通り店」でピースボート同窓会に参加、
「東横 INN 那覇国際通り美栄橋駅」宿泊

・2 日目　沖縄本島最南端の「荒崎」と「ひめゆり学徒散華の跡」、「ひめゆりの塔」で献花、
宜野湾市の「嘉数高台公園」から普天間基地見物、「首里城公園」を見学、
レンタカー返却し、那覇空港へ、昼食は空港で沖縄そば
那覇空港 13 時 15 分→北大東島 14 時 15 分、「ハマユウ荘」にチェックイン、
徒歩で「大東宮」、「ビロウ林」、宿で夕食

・3 日目　朝、宿でレンタカーを借り、時計反対周り島一周へ、「北港」、「西港」、「魚市場」、
「上陸公園」、「北大東漁港」、「江崎港」、「沖縄最東端の碑」、「秋葉神社」、
「天狗岩」、「空港」、「長幕（ながはぐ）崖壁及び崖錐の特殊植物群落」、

「村役場」、西浜の「国標」、「民俗資料館」、「灯台」見物、
レンタカー返却（走行距離 34km）、宿で昼食、空港の売店で買い物や飲食、
北大東島空港 14 時 45 分→南大東島空港 15 時 05 分、「ホテルよしざと」に
チェクイン、徒歩で「ラム酒工場」で試飲、「ビジターセンター」は立ち寄るも
閉鎖中、宿で夕食

・4 日目　朝、宿でレンタカーを借り、時計反対回りで島一周へ、「西港」、「キャンプ場」、
「金毘羅宮」、「塩屋海岸プール」、「亀池港」、「日の丸山展望台」、「海軍棒プール」、
「空港」、「秋葉神社」、「秋葉地底湖」、「線路跡」、「本場」、「バリバリ岩」、「北港」、
「南大東漁港」を見物し、宿の前の食事処「いちごいちえ」で昼食、
「ふるさと文化センター」でシュガートレイン見物、「大東神社」参拝、
鍾乳洞「星野洞」入場、「大東ゴルフ倶楽部」でゴルフ、「大池展望台」、
「夕日の広場」、干潮の「塩屋海岸プール」再訪、
レンタカー返却（走行距離 68km）、宿で夕食、連泊

・5 日目　電動アシスト自転車を借りて宿を出発、「南大東島気象台」、「塩屋海岸プール」、
「亀池港」、「海軍棒プール」、「ノエビア南大東島海洋研究所」外観見物、
「ふるさと文化センター」入場見学、「いちごいちえ」で昼食、空港へ
南大東島空港 15 時 45 分→15 時 5 分北大東島空港 15 時 35 分→那覇 16 時 40 分、
妻と空港で合流し 3 人で打ち上げ、
ノブさんと別れて、妻と「東横 INN 那覇旭橋駅前」にチェックイン

・6 日目　那覇空港 7 時 15 分→8 時 15 分石垣空港 10 時 05 分→与那国空港 10 時 35 分
ヨコさんと姉さんと合流し、空港を出てレンタカーを借り出発、
岩山「ティンダバナ」、昼食は「楓食堂」、「Dr.コトー診療所」に入場、
「ナーマ浜」、「日本最西端の碑」、「南牧場」、「日本最後の夕日が見える丘」、
「久部良バリ」を見物し、宿「VILLA エデンの幸 旅物語」にチェックイン、
宿で夕食、ヨコさんと姉さんは「民宿みねむら」泊

・7 日目　レンタカーで島内巡り、「日本最西端の碑」再訪、「多目的集会施設」で
クルーズ船歓迎イベント見物、「アヤミハビル館」入場、「わかなそば」で昼食、
「立神岩」、「軍艦岩」、「東崎（あがりざき）灯台」、「アリシ」を見物、
カフェ「パネス」で休憩、「人面岩」見物、夕食は「海人食堂」、
女性は「民宿むねむら」、男性は「VILLA エデンの幸 旅物語」泊

・8 日目　朝、空港へ行きレンタカー返却（走行距離 92km）
与那国島 9 時 05 分→9 時 35 分石垣島 10 時 35 分→羽田空港 13 時 25 分
羽田空港で昼食、16 時に帰宅

私 1 人分の費用総額は約 20 万 4 千円、詳細は以下に示す。ついでに妻の費用は約 10 万円で、その行程は首都圏発着の与那国島 2 泊 3 日個人旅行に相当する。

・交通費　112033 円（1 人分）
飛行機　90850 円（1 人分）
羽田～那覇　13920 円

那覇～北大東島　13330 円
北大東島～南大東島　6490 円
南大東島～北大東～那覇　13330 円
那覇～与那国　17670 円
与那国～石垣～羽田　26110 円

レンタカー　18183 円（1 人分）
沖縄本島（1 台分 14115 円）　7058 円（1 人分に換算）
（レンタル代 7300 円、高速道路 2250 円、駐車場 1200 円、ガソリン 3365 円）
北大東島（1 台分 5020 円）　2510 円（1 人分に換算）
（レンタル代 4000 円、ガソリンは 1 km30 円で 1020 円）
南大東島（1 台分 7960 円）　3980 円（1 人分に換算）
（レンタル代 6600 円、ガソリンは 1km20 円で 1360 円）
与那国島（1 台分 18538 円）　4635 円（1 人分に換算）
（レンタル代 16300 円、ガソリン 2238 円）

その他交通費　3000 円（1 人分）
レンタサイクル南大東島（1 台半日 2000 円　2 台のうち 1 台は不調で無料）
自宅～羽田空港往復、那覇のモノレールなどが約 2000 円）

・宿泊費　59610 円（1 人分）
沖縄本島「東横 INN 那覇国際通り美栄橋駅」　6000 円（シングル朝食付き）
北大東島「ハマユウ荘」　9200 円（ツイン 2 食付き）
南大東島「ホテルよしざと」連泊　18270 円（ツイン 2 食付き、連泊）
沖縄本島「東横 INN 那覇旭橋駅前」　5500 円（ツイン朝食付き、1 人分）
与那国島「VILLA エデンの幸 旅物語」　11440 円（ツイン 2 食付き、1 人分）
与那国島「VILLA エデンの幸 旅物語」　9200 円（ツイン朝食付き、1 人分）

・入場料など　4600 円
沖縄本島「ひめゆりの塔」献花代　300 円
北大東島「民俗資料館」　500 円
南大東島鍾乳洞「星野洞」　800 円
南大東島「ふるさと文化センター」　200 円
南大東島「ゴルフ倶楽部」プレー費　2000 円
与那国島「Dr.コトー診療所」　300 円
与那国島「アヤミハビル館」　500 円

・その他　約 28000 円
ピースボート同窓会会費　8500 円
食事（昼食 8、夕食 3、飲酒費用等）　約 19500 円